

郷土資料館だより

Vol.43 No.3
2021.3.20

3市共同企画展「採る・捕る・獲る—富士・沼津・三島の狩猟・採集—」報告

- 開催期間 三島会場 令和2年9月5日(土)～10月18日(日)
沼津会場 7/4(土)～8/30(日) 富士会場 10/31(土)～1/24(日)
- 展示資料数 147点 ●入場者数 三島会場 6,308人(3会場合計15,388人)
- 主 催 富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会

当館が加盟する富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会の共同企画展として、本年度は3市域で行われてきた狩猟・採集の様子を紹介する巡回展を行いました。この3市域は、箱根山・愛鷹山・富士山、黄瀬川・狩野川・富士川、駿河湾といった豊かな自然に恵まれています。そこでははるか昔から現代にいたるまで、人々が食糧を獲得するために、さまざまな形で狩猟・採集を行ってきました。本展では、山・川・海の3つの空間で展示構成を分け、考古資料や民俗資料を中心に、古文書や浮世絵なども使って各地域の狩猟・採集の様子を紹介しました。

山の展示では、旧石器・縄文時代の石器類や、近代に使用されたカスミ網・トラバサミ、現在行われている巻狩や罟猟の様子などを紹介しました。川の展示では、川漁の道具であるモジリ(筒状の仕掛け)やビクなどの民具のほか、川海苔の採集の様子を紹介し、海の展示では、駿河湾で使用された全長4mのツキンボ(鉈)やタコツボ、きんちゃく網漁の様子などを紹介しました。

漁具については一見して使い方のわからないものも多く、来館された方たちは皆さん熱心にご覧になっていました。



企画展「三島を襲った災害と復興」報告

- 開催期間 令和2年10月31日(土)～令和3年2月28日(日)
- 展示資料数 84点 ●入場者数 17,218人

今年度が開催が予定されていた東京オリンピック・パラリンピックでは理念のひとつとして災害からの復興が掲げられていたことから、三島における過去の災害とそこからの復興をテーマとした企画展を行いました。展示では江戸時代から戦後までの火災、風水害、地震などを取り上げ、被害を記した古文書や絵図・絵葉書や、復興の様子がわかる写真集などを展示したほか、家庭で備えるべき備蓄品なども紹介しました。

●関連事業

ふるさと講座「北伊豆の災害現場を訪ねて」令和2年11月9日(月)

①狩野川放水路見学(9:00～12:00、参加者:9人)

②市内災害関連スポットめぐり(13:30～16:00、参加者7人)

講演会「三島の自然災害」令和2年12月12日(土)／講師:増島淳氏
参加人数:21人

災害の歴史と自然地理的条件からみた三島の災害の特徴について

防災講座「大規模地震を体感しよう」令和3年2月13日(土)

参加人数:139人 協力:危機管理課

最大震度7を体験できる起震車で大規模地震を体感してみる
(写真右上:展示風景、右下:狩野川放水路見学)



企画展「新規収蔵品展」開催

●開催期間 令和3年3月20日(土)～6月6日(日)

郷土資料館では寄贈や購入によって毎年新たな資料を収蔵しています。しかし、数多くの資料の中から館内の展示に使用されるものは一部のテーマに関するものになりがちです。そこで今回は最近(平成30年度～令和2年度)に館が収集した資料を幅広く紹介していきます。

◆主な展示資料

- ・安久 秋山家文書(秋山^{かみなん}富南関連資料中心)
- ・大場 青木家文書(近世大場村の行政関連資料、青木家の農業経営・金融関連資料)
- ・山中新田 津田家資料(江戸時代、茶屋を経営していた津田家の資料)
- ・災害関連資料(北伊豆震災写真帳、狩野川改修事業)
- ・戦争関連資料(出征旗、戦時国債、中島飛行機関連資料、戦時中の学校資料)
- ・馬具製造、菓子製造、米屋など三島の職人・商人に関する民具等
- ・浮世絵、古写真、絵葉書

◆大場 青木家文書

今回の展示資料のひとつに「大場 青木家文書」があります。この資料群は令和元年度(令和2年2月)に古書店より購入したものです。近世後半の資料が中心で一部明治時代のものも含み、全体で350点程度、泥水をかぶった資料も多く、表面に泥がこびりついたり、濡れた後に乾いたために紙がくっついていたりするものがたくさんありました(写真右)。紙がくっついてカチカチになり、中を開くのが不可能なものもありましたが、多くは軽く泥を落として丁寧に開くことで中を見ることができました。

大場村の青木家は近世後半には村名主を勤めていました。そのため村の行政や経済に関わる資料が残されていました。今回はその中から特徴的な資料をいくつか紹介します。



①「差上申米相場書之事」

江戸時代の伊豆国には三島宿や下田町などに米相場が4～5か所あり、大場村もその中のひとつでした。米相場では米と金の交換比率が決まります。大場村は稲の収穫が一段落した10月下旬に領主に米の換金比率を報告していたようです。天保12年～安政2年(1841～55)の範囲で9年分の相場書が確認できました。

大場村は下田街道と熱海方面へ向かう道の分岐点にあり、また、村高も760石以上とこの地域では比較的大きな村でした。米相場の存在は大場村が地域経済の中で重要な位置を占めていたことを表しています。



②天保13年(1842)6月「今般江戸御屋鋪御類焼二付冥加上金書上帳」

③弘化3年(1846)9月「殿様日光奉行御勤被遊候二付金五両取集帳」



江戸時代の農民の義務は第一に年貢を納めることですが、その他にも川・道に関わる土木工事や東海道の公的輸送の補助業務などに金銭や労働力を提供しなければなりません。これら制度的に決められたものの他にも領主から理由を付けては負担を強いられることがあったようです。ここに上げた2点はそのような負担があったことを伝える資料です。

江戸時代後半の大場村は相模国荻野山中藩大久保氏の領地でした。荻野山中藩とは小田原藩大久保氏の親戚筋に当たる藩で、領地は1万石強から1万6千石、城はなく荻野(現厚木市)に陣屋を構えていました。②の資料の内容は住民の名前と金額が列記されただけのものですが、表題から荻野山中藩の江戸藩邸が火災に遭い、その復旧に必要な資金を求められたものと考えられます。大場村全体で9両を納めていますがこのうち名主又兵衛(青木氏)が7両を負担しています。(写真左上)

③も住民の名前と金額の列記があるのみですが、表題から藩主が日光奉行という幕府の役職に就いたことを契機に大場村として藩に5両上納することになり、その際の住民からの集金状況を記録したもののようです。(写真右)



④嘉永7年(1854)1月「異国船二付駿豆御領分一統高百石二付人足壱人当り取調帳」

嘉永6年にペリー提督率いるアメリカ合衆国の艦隊が開国を求めて来航、浦賀(現神奈川県横須賀市)に停泊し幕府との交渉を行いました。この頃にはアメリカ以外の国の船も日本近海に出没しており、多くの藩が海防に当たっていました。この一環として譜代大名である荻野山中藩にも海防のための人員動員が求められたようです。軍事は武士の専門分野ですが、武士だけで軍隊を編成することはできず、補給や後方支援などのためには武士以外の人員が必要となります。そこで藩は領内の村から人員を徴集することにしたのでしょう。「駿豆御領分」と地域を限っていますが、荻野山中藩は駿豆2国に1万石ちかい飛び地を領地として持っていたので、村高100石に付き人足1人ということは百人ほどを徴集するつもりだったこととなります。

この資料によると大場村からは藩の役所が置かれた松長(現沼津市)へ4人、江戸へ4人の計8人が派遣されることになったようです。大場村は村高763石でしたので高100石に付1人の割合であれば8人出さなければならない計算になります。また、派遣する者への賃銭として松長行きには4人分で年間5両、同じく江戸行きには8両と見積もっています。資料には1～6番の人足として8人ずつ名前が記されています。6番に分かれていることから途中で人員交代する計画だったのでしょう。



三島の歴史とジオポイント・21

——伊豆三ノ宮・楊原神社——

三島市役所の通用門を出て「御陣屋坂」を登りきると、西面した伊豆三ノ宮・楊原神社(北田町4番7号)があります。

社伝によると、当社は古来沼津市の香貫地区にありましたが、香貫地区が駿河国になった時に現在の三島市・南本町に遷座しました。しかし元和9(1623)年に徳川家光が將軍宣下を受けるため上京する際の御殿(宿泊所)が同地に築造されることになり、現在地に再度遷祀しました。御祭神は三嶋大社と同じ大山祇命おおやまつみのみことと事代主神ことしろぬしのかみです。

沼津市・宮脇の旧地には、大山祇命を御祭神とする楊原神社があります。三島の楊原神社は平安時代後期に伊豆国府の崇拜所として勧請された可能性もあります。

当社で最も目立つのは三島溶岩(約1万年前に富士山から流下)製の石鳥居です。大正13年に奉納されたもので、前年の関東大震災で以前の鳥居が倒れ、これを教訓に基礎部分を頑丈に作ったようです。

昭和5年の北伊豆地震では倒壊を免れた貴重な鳥居です。現存する三島溶岩製の石造物では最大・最高の建造物です。石材の産地は、日本大学三島校舎の東側にあった「小堰こせきの石切り場」でしょう。

玉垣と社名碑は、北江間産の安山岩(数百万年前の火山の本体)で作られています。左右の石燈籠の奉納時期は不明ですが、火袋が作り替えてあり、笠も破損していることから、北伊豆地震で倒れたのでしょう。石材は長岡凝灰岩上部層(数百万年前の火山灰が海底に堆積し固結したもの)製です。北江間方面の石切り場から産出したものです。

最も興味深い石造物は、社殿裏側に置かれた石燈籠の竿です。享和2(1802)年に当社に奉納されています。石材は沼津市の徳倉山に分布するプロピライト(変朽安山岩・母岩が熱水作用で変質したもの)のようです。徳倉山は楊原神社の旧地の裏山にあたります。奉納者はそのことを知っていて石材を取り寄せ奉納したのでしょうか。

境内には推定樹齢400年と記された榎があります。その根元に、三島七石の一つ「蛙石かえるいし」が置かれています。よく見ると蛙の目らしきものが認められ、石の下半分を埋めると蛙そっくりです。この石と手水鉢に利用されている大石は、約2900年前に発生した富士山東斜面の大崩壊に伴う「御殿場泥流」によって運ばれたものです。

いつ参拝しても、境内はきれいに掃除されています。氏子の皆様が大切に守っておられることが心強いです。



楊原神社の石鳥居



三島七石の一つ「蛙石」右側に目がある

(郷土資料館運営協議会委員・増島淳)

三嶋大社の古文書をよむ 第12回

◆彗星の出現

南北朝時代、室町幕府が関東支配のために置いた鎌倉府の奉行人、清原繁隆という人物から三嶋大社神主(盛実)に宛てた依頼書(清原繁隆奉書)。平成4年(1992)刊行の『静岡県史』資料編6、同年刊行の『三島市誌増補』資料編Ⅱでは、繁隆の所属と人物を確定していませんが、中世の関東地域の古文書を精力的に研究した湯山学氏によって確認されています(湯山学氏『鎌倉府の研究』平成23年(2011)刊、初出平成15年(2003))。古文書の年紀、暦応3年(1340)時点では、後の鎌倉府のような支配組織は未整備とみられますので、厳密には鎌倉府という呼び名、またその奉行人という言い方は正しくないのかもしれませんが、鎌倉には足利尊氏の嫡男で11歳の義詮が常駐し、周囲には政務を担う官僚たちがいたものと考えられますので、初期鎌倉府としておきましょう。



彗星以下変異により、供僧等を相催し、社壇において信読大般若を転読せらるべきの由候、仍つて執達件の如し、
 暦応三年三月十日 散位繁隆(花押)
 (神主盛実)
 三嶋宮大夫殿

本文を見てみましょう。冒頭の「彗星以下変異」の文言が目を引きます。古文書や古記録をみていると、当時の人々は、不思議な事柄を「変異」とか「怪異」という言葉で表現していることに気がきます。この古文書では、彗星出現という変異に対して、供僧を動員し三嶋大社の社壇にて、当時最も効力のある經典とされた大般若経の読誦をさせよと依頼しています。神前で僧侶が読経をするという神仏習合の時代らしい依頼です。彗星の出現は兵乱や疫病流行との関わりが指摘され、凶事の一つとして忌避されていました。そのため、彗星の消滅、もしくは起こるかも知れない凶事を防ぐための読経を、三嶋大社に指示したのです。この13日後、3月23日付けの清原繁隆の奉書が残っていますが、書面から三嶋大社で七日間の神楽祈祷と大般若経読誦が営まれたことがわかります。

『鶴岡社務記録』(『神道大系』神社編鶴岡より)では、三嶋大社への依頼の3日前、3月7日に、鎌倉の鶴岡八幡宮で「彗星御祈」が始められたことが記されています。もちろん祈祷が始まったとて彗星は消滅しませんが、重ねて三嶋大社に対しても祈祷依頼を行うよう指示が出たのかも知れません。なお、後に一条兼良が編した有職故実書『玉英記抄』によって、さらに3日前となる3月4日、京都でもこの彗星が目視されていたことがわかります。同記には彗星の位置も記録され、「今夜已犯太微宮東蕃次相星」=「今夜、已に太微宮(の)東蕃(の)次相(の)星を犯す」とあります。わかりにくい表現ですが、この日彗星は、現在の星座に合わせると「おとめ座」δ星にかかっていたこととなります。

汚れた雪だるまと称される彗星は、太陽に近づくことで溶け、ダストを噴出することで光輝きます。多くは夜明け前や日没直後、太陽に近い辺りで明るい彗星が見られることが多いのですが、地球との位置関係などから、見かけ上太陽から離れたように見えても明るい場合があります。暦応3年3月4日は現在のグレゴリオ暦に換算すると4月9日頃に当たりますが、その時期のおとめ座の位置にあったとすれば、日没後かなり長い時間見えていることとなりますし、目視できた日数も比較的長かったと推測できます。

なお、この時の変異は彗星の出現だけではありませんでした。『鶴岡社務記録』や北朝に仕える官人中原師守が記した『師守記』には、3月12日から3日間、日月が赤く染まり光が弱まったと記録されています。原因は水蒸気量の異常な増加、火山噴火(この年の1月に阿蘇の噴火が記録されている)なども考えられますが、現在の暦で4月上旬に当たる時期に、畿内から関東にかけ広い範囲で、しかも3日にわたって影響を及ぼした現象ですから、大規模な黄砂の仕業かも知れません。しかし、当時の人々は自然科学上の現象を人の営みと直接結びつけて考えました。南北朝の内乱が続き、前年には南朝方の後醍醐天皇が崩御しています。彗星の出現に加え、不気味な日月の異常が続き、不安に駆られた人も多かったでしょう。実際、3月14日に一条経通が北朝の光厳院のもとに参上し、変異に対する徳政や改元の必要を奏上し、3月18日には足利尊氏から、後醍醐天皇の御霊を崇徳院と同様に(崇徳院=かつて保元の乱後の不慮の死により怨霊として恐れられた)、廟所を定めお祀りすべきとの奏上があり、北朝の朝廷ではその審議に入っています(『玉英記抄』)。この先、どの様な凶事が起こるのか……、人々は、相次ぐ「変異」に戦々恐々だったのでしょうか。

(郷土資料館運営協議会委員・奥村徹也／三嶋大社宝物館 学芸員)

郷土教室の報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる郷土教室（体験イベント）をボランティアさんと一緒に開催しています。令和2年11月から3年2月までに行った事業をご紹介します。

日 程	郷土教室	内 容	参 加 者
11月 7日(土)	楽寿園の自然	ドングリ工作と葉っぱの拓本作り	48人
11月15日(日)	楽寿園の自然	ドングリ工作と葉っぱの拓本作り	65人
11月21日(土)	江戸時代の三島宿	立版古(配布のみ)	10人
11月23日(月祝)	昔のどうぐ	小麦粘土でミニチュアうどんづくり	85人
12月 5日(土)	わら細工	わらを使った正月の輪がざりづくり	22人
1月16日(土)	機織り体験	裂き織りの体験	中止
1月23日(土)	リリアン編み	毛糸を使ったリリアン編みで 干支のうしの編みぐるみづくり	11人※
2月 6日(土)	ブンブンゴマづくり と紙芝居	ブンブンゴマづくりと三島の昔ばなしの紙芝居	52人
2月23日(火祝)	遊んで学ぼう 富士山デー	富士山の溶岩、伊豆半島の化石観察、 楽寿園内溶岩巡りツアー	63人

※新型コロナウイルス感染症対策のため、参加予定の方へお家で作れるようにキットを配布しました。



昔のどうぐ



紙芝居

そよかぜ学習

- **学習内容** 体験学習 昔の道具の体験
館内見学 2階常設展示室の解説
- **受け入れ学校数** 市内12校・市外2校

本年度も市内・周辺市町の小学3年生の課外授業「そよかぜ学習」の受け入れを実施しました。1階多目的室では石臼・製麺機を実際に動かしてもらい、2階常設展示室では昔の職人(大工・傘職人・紺屋など)のお話や、農家にあがっていろり裏の役割や自在鉤・箱膳かまの使い方について解説を聞いてもらいました。今年は手指や道具の消毒や職員との間隔をとるなど新型コロナウイルス感染症対策を徹底しました。



寄贈・購入資料の紹介

令和2年10月から令和3年1月までに、次の方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます。また、新たに1件の資料購入がありました。

●寄贈資料

寄贈者	資料名	点数
土山早規子氏	コンデンスミルクラベル、金線ミルク店舗写真、極東煉乳株式会社カレンダー、花島兵右衛門肖像写真、花島家関係近代古文書・古書(「内国産煉乳用砂糖二関スル請願」・『最新実利養蜂の経営』等)他	56点
飯島久夫氏	馬具製作関係資料(未完成鞍・型紙・鞍骨等部品・工具・作業風景写真等)、足踏み式ミシン、軍隊手帳他	約190点
瓜島常泰氏	謄写版、ローラー、裁縫コテ、『伊豆魂神社誌』、受法寺関係近代古文書他	約80点
大川眞氏	古書、近代資料(中郷村地図・三島町市街図・中島飛行機関連資料等)、古写真(三島野戦重砲兵旅団司令部庁舎新築工事地鎮祭・三嶋大社宝物館前等)、接待茶屋関連資料(開所50周年記念写真・冊子)、絵はがき(三島名所・支那事変出動軍人慰問袋作業等)他	61点
成川和子氏	日章旗、ゲートル、軍服	7点
小出芳江氏	小出米店関係資料(看板・調度・業者登録票等)、支那事変従軍記章、帝国在郷軍人会会員徽章他	75点

●購入資料 浮世絵「五十三次 三嶋」

本浮世絵は、江戸時代後期の浮世絵師歌川国郷(くにかよ 1800?～1858)が筆をとったもので、十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』から、三島宿に関わる2場面が狂歌とともに描かれています。

下段には、箱根西坂での道中、向かいからやって来る大名の女中らに、白い手ぬぐいをかぶることで色白の粋な男だと思わせようとした喜多八が、誤って褌をかぶってしまったシーンを取り上げています。右側には弥次郎兵衛が描かれており、指をさして喜多八の間違いを知らせているものと思われます。

上段は、三島宿に着いた夜の出来事で、晩に食べようと購入していたスッポンの存在を忘れて寝入り、スッポンが布団の中に潜り込んで大きわぎになったシーンを取り上げています。指を噛まれているのが弥次郎兵衛、右側で手をあげて驚いているのが喜多八です。右上に「お竹」という三島女郎も描かれています。左上の男性は、西坂を下る道中で意気投合した「十吉」という人物で、この騒ぎに乗じて弥次郎兵衛の金を盗もうとしている様子です。

なお、この絵の左下には「若 芝神明前 若与版」という印が摺られています。これは版元の印で、芝神明前三島町(現東京都港区芝大門一丁目)の若狭屋与一(若林堂)が版元であったことがわかります。また、その印の脇には幕府から出版許可が下りたことを証する「改」印・「寅六」印も摺られています。幕府の改印・年月印の併用時期は嘉永6年～安政4年(1857)に限られることから、本浮世絵に版行許可が下りたのは、左の期間中の寅年＝安政元年(1854)のことと推測されます。

作者国郷は、歌川国貞(三代豊国)の門弟の一人で、嘉永年間(1848～1854)末頃から名所・風俗画や合巻本の挿絵などを描くようになりました。その活躍時期は決して長くはありませんが、本浮世絵は彼が依頼を受けはじめた時期の作品の一つに位置付けられるでしょう。



刊行図書のご案内

〔三島宿関係史料集〕(11) 令和3年3月31日刊行予定 (頒布価格500円)

文久3年に三島宿の間屋場で作成された「御用留」のうち、同年4月までの部分を翻刻したものです。この年は約230年ぶりの将軍上洛があった年で、幕末の混乱期における三島宿及び街道交通の様子が垣間見える史料です。地域史、交通史、幕末史の研究にお役立てください。

〔三島の石造物2 大場〕 令和3年3月31日刊行予定 (頒布価格700円)

ボランティアの皆さんと共に平成29年度より行ってきた大場地区の石造物調査の結果をまとめた目録です。全点写真・イラスト入り、石材・銘文なども掲載しており、長年地元の皆様を守られてきた地域の宝を後世に伝える貴重な情報がつまっています。大場地区の散策などに役に立つ資料です。

〔三島市郷土資料館研究報告〕13 令和3年3月31日刊行予定 (頒布価格700円)

毎年恒例の研究報告もおかげ様で13号を数えるまでになりました。今年も近世、近代の三島の歴史に加え、三島市民が大いに関心を寄せる三島宿内のジオポイントについての考察が掲載されています。地域の歴史・文化・自然を深く知るための一冊です。

【内容】

明治前期における地方土木事業の振興—伊豆地域を事例として—
「ジオツアー三島宿」の成果(9)—静岡県東部地域から出土した古代瓦の産地—
天保期三島宿の拝借金残高の増加とその対策について
関東大震災における三島市大場の被害と復興
戦後における三嶋大社例祭関連資料目録 附 参考文献リスト

桜井祥行
増島 淳
平林研治
笹山曜子
保科桃子

郷土資料館の新型コロナウイルス感染症対策

郷土資料館では12月上旬から入館者の検温と入館者情報の収集をはじめています。検温については、機械による自動検温を基本としています。当初は楽寿園の所有する自動温度計測器を借りてエントランスに設置していましたが、2月4日に株式会社 ITS 様(三島市梅名)より「サーマル AI カメラ」を寄贈していただきましたので、以後は入館者の皆様にこの装置による検温をお願いしています。

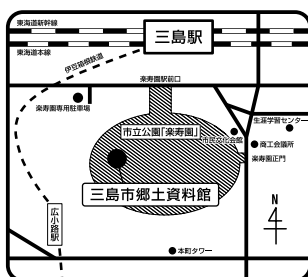
この「サーマル AI カメラ」の前に立つと AI が自動で人間の顔を認識し、温度を測定した上で体温が平常の範囲かどうかを判定、日本語で知らせてくれます。コンパクトな作りで場所をとらず、郷土資料館のエントランスに設置するにはちょうどよい大きさです。

入館者情報についてはあくまで任意ですが、入館日時と連絡先を記入していただき、有事の際には保健所等へ情報提供を行うこととしています。記入票の受け取りやエンピツの消毒など手間がかかりますが、この手間がむだな作業になることを祈るばかりです。



郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045
開館時間 午前9時～午後5時(4月～10月)
午前9時～午後4時30分(11月～3月)
休館日 毎週月曜日(祝日のときは翌平日)、
年末年始
入館料 無料(ただし楽寿園入園料として別途
300円がかかります。15歳未満は無料、
学生は学生証提示にて無料。)



三島駅(南口)から徒歩5分。

郷土資料館だより

Vol.43 No.3(第129号)

発行日 令和3年3月20日(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館

発行 三島市教育委員会

E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp

URL : <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>

